

フーベルト・ハイッス駐日オーストリア共和国大使のことば

一八六九年に、オーストリア＝ハンガリー帝国と日本の間で、修好通商航海条約が締結され、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世より明治天皇に、ベーゼンドルフアー社のグランドピアノが贈られました。天皇が西洋音楽を耳にしたのはこれが初とされています。

それから一五〇年経った今日の日本では、オーストリアのクラシック音楽はとても愛されていますが、日本におけるクラシック音楽の黎明期に活躍した両国の音楽家たちのことはあまり知られていません。

ルドルフ・デイトトリヒは、一八八八年、東京藝術大学の前身である東京音楽学校に招聘されました。楽器演奏や音楽理論、作曲を指導しただけでなく、優秀な学生をヨーロッパで学ばせるように当時の文部大臣に進言したそうです。さらに、六年ほどの滞在中には日本音楽の研究にも取り組みました。

本書著者の平澤博子博士は、長年ウィーンでデイトトリヒ研究に携わってこられました。その長年の成果が、一五〇周年という記念の年に日本で出版されることは、オーストリア大使と

通商航海条約締結から一五〇年の記念すべき年に当たります。本書の刊行が、両国文化のさらなる交流の深化の一助となれば、これに過ぎる喜びはありません。

平澤 博子

フーベルト・ハイッス駐日オーストリア共和国大使のことば

3

澤和樹東京藝術大学長のことば

5

はじめに

7

第一章 ウィーン・修業時代

—— 綺羅星のごとき師・同輩とともに

織物都市ビアラから楽都ウィーンへ

18

師ブルックナーとの出会い

20

師の作曲を助けたデイトトリヒ

23

優れた師たちに恵まれて

25

オルガン部門で全審査員一致の一等賞

27

学校は出たものの——下積み時代の始まり

30

結婚、そして極東日本からの音楽教師招請

33

世紀末「オーストリアⅡハンガリー帝国」の事情

35

デイトトリヒの苦悩と決断

37

いざ日本へ!

40

第2章 東京音楽学校教師時代

——日本への愛と近代音楽創生への献身

- 新天地——東京音楽学校 46
- 教師魂を刺激した学校と生徒たち 49
- 先輩エツケルトの支え 52
- ルドルフ皇太子訃報の衝撃 54
- 《憲法発布の頌》を作曲・演奏 56
- 日本音楽會と鹿鳴館 58
- 妻ペリーネのデビュー 64
- 引っ越し 66
- 授業風景 68
- 薰陶を受けた幸田露伴の妹たち 74
- ウィーンで花開いた幸田延の才能 77
- ヨアヒムに師事した安藤幸 78
- 鹿鳴館で開かれた「日本音楽會」 82
- アドルフ・テルシヤクの来日 86
- 『音楽雑誌』のこと 91

帝国議会開院式祝賀記念音楽会 100

俗曲家の不平 103

妻ペリーネとの永遠の別れ 106

東京音楽学校の危機と伊澤校長の尽力 113

情熱の教育家・伊澤修二 116

ドイツトリヒに新局面開く 118

新たな心の支えと二つのピアノ行進曲 122

濃尾地震と慈善演奏会 128

温泉保養 131

クーデンホーフ・カレルギーの手紙 135

送別演奏会、そして帰国 139

第3章 晩年・再びのウィーン

—— 大オルガニスト、教育者として

変貌する世紀末のウィーン 150

「私はなんて美しい夢を見たんだろう！」

宮廷オルガニストに登用 153

大オルガニストへの道 157

超多忙な音楽家活動と経済的困窮 163

音楽関係諸団体の要職につき尽力 165

後継者たち——ゴラー、デイテール、シュッツ 169

ハプスブルク家の崩壊とディットリヒの最期 173

ディットリヒ年譜 180

ディットリヒ作品目録 187

参考文献一覧 193

調査・紹介諸機関——公文書館・図書館・研究所 199

「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」のこと 桑村益夫

おわりに 207

203

索引 214

織物都市ビアラから楽都ウィーンへ

一八六一年四月二五日、フランツ・ルドルフ・アウグスト・ディットリヒ (Franz Rudolf August Dittrich) はオーストリア＝ハンガリー帝国ガリチア地方のビアラ (現ポーランド、クラクフの西南五〇キロ、チェコとスロバキアの国境近く) で、音楽教師兼カペルマイスターの父ヨハン・アントン・ユリウス (Johann Anton Julius 1825-1914)、職人家庭出身の母、ソフィー・ベアタ・フラセック (Sophie Beata Frassek 1826-?) の間に誕生しました (図1)。ディットリヒの両親が一八五七年結婚した町クロイツブルクも現在のポーランドに属します。祖父フランツ (Franz 1796-1858) は軍人で、オーボエ奏者、楽器製造業もしていたということです。ディットリヒにはヘドウィク・クレプス (Hedwig Krebs) という姉妹があったようです。来日当時、東京音楽学校に提出したディットリヒ自筆の英語の履歴書には、五歳でピアノ、七歳でヴァイオリン、九歳で教会音楽、一〇歳で音楽理論を学ぶ、とありますが、おそらく音楽教師であった父から、最初の手ほどきを受けたのだでしょう。



図1 デイトリヒの出生証明書

さて、今日のポーランドは中央ヨーロッパの東部に位置し、日本よりひとまわり小さな国ですが、一一一六世紀までは東ヨーロッパ最大の王国として繁栄。一八世紀にロシア、プロイセン、オーストリアの三国に分割され、突然、ヨーロッパ地上から消滅。先の大戦でも再び分割と、外国からの支配、干渉、差別を受けながらようやく国力を回復したという、希有な歴史をもった国です。こうした興亡流転の中で、デイトリヒが生まれた頃の一九世紀のビアラは、ハプスブルク家の管理下でありヨーロッパ有数の手工業、織物工業地域の一つに数えられていました。

大戦後、隣接市のビエルスコと合併されたビアラ(Bielsko-Biala、ビエルスコ・ビヤワ)は、現ポーランドの西南部に位置し(図2)、ドイツ語版ウィキペディアでは、デイトリヒを町の名士として、「オーストリアの音楽家、東京の音楽大学教師」と紹介しています。

ポーランドが東西隣接する諸大国から絶えず受けた大きな試練の一つとして、あのアウシュビッツ収容所の出

師ブルックナーとの出会い



図2 ビアラ-ウィーン関連地図

来事は、未来永劫払拭できない人類の痛恨極まりない歴史です。

一八七五年、一五歳のデイトトリヒは故郷ビアラの北西、ドイツ側に位置する当時は近代工業都市であり、最も古い都市の一つ Breslau の普通高等学校へ進学、三年後、卒業します。

こうしてデイトトリヒは、息子の音楽教育に非常に熱心で深い理解をもった両親の支えを得て、一八七八年一八歳で、音楽の都ウィーンへ武者修行へと旅発つたのです。いざ音楽の都、ウィーンへ！

ウィーンの住まいは四区にあるホイミュールガッセ2aでした。バロック建築の傑作の一つに数えられるカールス教会や、ウィーン市民の胃袋、食品市場ナツシュマルクトがあり、また、「音楽都市ウィーン」の名を確固たるものとした、ブラームス、グルック、J・シュトラウスⅡ、シューベルトなどが住まいとしたのも、このウィーン四区でした。若いデイトリヒは、学校にも近い音楽環境に恵まれたこの地で、活気に満ちた新生活をスタートしたのでした。

デイトリヒは、ウィーン・コンセルヴァトリウムの一八七八―七九年度に一年生として登録します。同校は、一八二二年に創設されたウィーン楽友協会の事業として傘下に置かれ、かのA・サリエリ(1750-1825)が一八一七年にまず声楽教室を、一八一九年にヴァイオリン一八三三年ピアノ、一八六八年オルガンと順次拡大、今日のウィーン国立音楽大学の礎石となった大変由緒深い学校です。デイトリヒがやってきた一八七八年頃の学校は、現ウィーン楽友協会にあり、音楽はもとより、演劇、ダンス、オペラなどの学科があり国際的な学校になっていました。

デイトリヒは後年、名オルガニストとして大成しますが、新学期の第一専攻はヴァイオリンで、J・ヘルメスベルガー(Joseph Hellmesberger 1855-1907)教授のクラスに登録しました。ヘルメスベルガー教授の父(J.Hellmesberger I 1828-93)は、宮廷楽長兼コンセルヴァトリウムの校長という名譽ある地位にあり、このヘルメスベルガー一家は、以後デイトリヒの人生に

大いにかかわってゆくことになるのです。

対位法はアントン・ブルックナー (Anton Bruckner 1825-96)、副科ピアノはウィルヘルム・シェンナー (Wilhelm Schenner 1839-1913) のクラスを選択。努力家だったディットリヒの成績はオーケストラ演習も含めて、「非常によろし」の「1」(日本では5にあたります)でした。一年生のディットリヒのクラスには、後にウィーン国立歌劇場指揮者兼ディレクター、ウィーンアカデミー教授、現サルツブルク音楽祭設立の事実上の創設者となるF・シャルク (Franz Schalk 1863-1931)、ブルックナー作品の名指揮者、今日のウィーン交響楽団の初代指揮者として活躍したF・レーヴェ (Ferdinand Löwe 1865-1925)、ウィーン音楽界の弦楽四重奏アンサンブルで、スターの座を占めていたヘルメスベルガー一家の末息子でチェリストのF・ヘルメスベルガー (Ferdinand Hellmesberger 1863-1940)、後のロゼー弦楽四重奏団創設者の一人であったチェリストE・ロゼー (Eduard Rose 1859-1943) など、錚々たる面々が同席していたのでした。

ところでディットリヒは真正正銘のおのぼりさんでした。音楽の都ウィーンでしつかり勉強し、故郷へ錦を飾ること、否それ以上に超一流の音楽家になることを夢見ていたのですから。そんなディットリヒは、ブルックナーにとって相当木訥ぼくとつ、不器用者にみえたようです。早速「ドイツのミヒェル」(生真面目で不器用者)と命名されることになったのでした。そのうちそん

人名索引

【ア行】

- 青山光子 (あおやま・みつこ)
Coudenhove-Kalergi Mitsuko 1874
～1941) 136
- アルタリア、カール・アウグスト
Artaria, Karl August (1855～1919)
160
- 安藤幸 (あんどう・こう 1878～
1963) 72, 73, 78-80
- 伊澤修二 (いざわ・しゅうじ 1851
～1917) 48, 50, 52, 58, 60, 73, 75,
101, 102, 103, 112-119, 121, 130,
142, 187, 188
- 伊澤多喜男 (いざわ・たきお 1869
～1949) 116, 117
- 伊藤博文 (いとう・ひろぶみ 1841
～1909) 56
- 井上馨 (いのうえ・かおる 1835～
1915) 60
- ヴァインベルガー、カミロ
Weinberger, Camillo (生没年不詳)
95
- ヴァルター、ブルノ Walter, Bruno
(1876～1962) 159
- 上眞行 (うえ・さねみち 1851～
1937) 101, 108, 187, 188
- ヴェッツェラ、マリー・フォン
Vetsera, Marie von (1871～89) 55
- ヴェーバー、カール・マリア・フォ
ン Weber, Carl Maria von (1786～
1826) 58, 76, 108
- ヴェーバー、フランツ Weber,
Franz [宮廷音楽師] (生没年不詳)
163
- ヴェルディ、ジュゼッペ・フォ
ルトゥニオ・フランチェスコ
Verdi, Giuseppe Fortunio Francesco
(1813～1901) 40
- ヴォルフ、フーゴー Wolf, Hugo
(1860～1903) 27, 38, 40, 178
- 瓜生繁子 (うりゅう・しげこ 1862
～1928) 74
- エッケルト、フランツ Eckert,
Franz (1852～1916) 52, 53, 61,
127, 136, 137, 168
- エプシュタイン、ユリウス
Epstein, Julius (1832～1926) 168
- エミール、ワルトトイフェル
Émile Waldteufel (1837～1915) 84
- オッフエンバック、ジャック
Offenbach, Jacques (1819～80) 29

【カ行】

- 樺山資紀 (かばやま・すけのり
1837～1922) 117
- カロリーネ・ランマー Karoline
Lammer (生没年不詳) 33, 65
- 北村季晴 (きたむら・すえはる
1872～1931) 73

【著者略歴】

平澤 博子（ひらさわ・ひろこ）

秋田県秋田市に生まれる。1976年ウィーン国立音楽大学音楽教育ピアノ専攻卒業。1993年ウィーン国立大学精神科学部音楽学修士課程修了。1996年同大学哲学博士課程修了、アウスツァイヒスング（特賞）受賞。哲学博士。1998年から東京音楽大学付属高等学校（音楽史・演奏研究）、東京音楽大学教職課程（リコーダー合奏）非常勤講師。2000年から2003年まで東京藝術大学非常勤講師（『東京芸術大学百年史』編集に携わる）。日本音楽教育学会会員。

ウィーンから日本へ 近代音楽の道を拓いた ルドルフ・ディットリヒ物語

2019年11月10日 初版第1刷印刷

2019年11月25日 初版第1刷発行

著 者 平澤博子

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／森田デザイン事務所

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1860-3 ©Hiroko, Hirasawa 2019 printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。